



引退賢者は のんびり開拓生活をおくりたい 2

ALPHA POLIS

鈴木竜一
Suzuki Ryuichi

ブリッツ

オーリンの最強の弟子、
《黄金世代》の一人。
剣技も天然ぶりも
最強な騎士。

ウェンデル

オーリンの最強の弟子、
《黄金世代》の一人。
ムードメーカーな
魔道具オタク。

オーリン

本作の主人公。
大陸一の大国・ギアディスに
その人ありと謳われる
最強の大賢者——だったが、
職場である学園に
夢想を尽かし賢者を引退。
《災いと呼ぶ島》・ラウシュ島で
開拓生活を始める。

パトリシア

オーリンを慕う元教え子。
真面目な美少女だが、
思い込みの激しさから
たびたび暴走する。

ジャクリーヌ

オーリンの最強の弟子、
《黄金世代》の一人。
強力な魔法と
ツンデレの使い手。

エリーゼ

オーリンの最強の弟子、
《黄金世代》の一人。
癒しの魔法が得意な
おっとりお姉さん。

イム

まごむすめ
バジル村の村長の孫娘。
天真爛漫な性格で、
パトリシアとは大の仲良し。

第1話 早朝のひと時

大国ギアデイスの王立魔剣学園おろりつまけんがくえんで教師をし、多くの優秀な生徒を育てた功績から《賢者じや》と呼ばれていた俺——オーリン・エドワースが学園を追われてから、どれくらい経つただろう。

今は南の小国エストラーダの国王陛下から依頼を受け、ラウシユ島で開拓生活を送っている。

《災いわざわいを呼ぶ島》とも呼ばれる謎めいたこの島に隠された秘密を解き明かしつつ、農業をしたり、島民たちと交流まじわりをしたり、教え子たちを指導しんどうしたり——賢者けんをしていた時と同じくらいか、それ以上に充実した毎日だ。

十

その優秀さから《黄金世代》と呼ばれた俺の教え子たち——その一角をなす元生徒のウエンデル、ジャクリーヌのふたりがラウシユ島に到着してから、初めての夜が明けた。

テントの外へ出ると、まだ朝霧が出ていている時間帯ではあるものの、すでにクレールは目覚めて軽い体操を行っていた。

彼女はラウシユ島調査団の一員として、エストラーダ王国から派遣されている女性だ。

「あつ、おはようございます、オーリン先生！」

「早いじゃないか、クレール」

「目が覚めてしまったんです。きつと今日が楽しみだったからでしょうね」

クレールの語る楽しみなこと。

それは、パジル村へ足を運び、村の長から俺たち調査団の村づくりの許可をもらうことだ。

ただ、これはかなり難航することが予想された。

何せ、村づくりとなれば、大陸側からかなりの人がやってくることになる。

この島の人は俺たちが来るまで島外との交流が一切なかった。となれば彼らは、一気に人の数が増えることに抵抗を感じるかもしれない。

幸い、島の調査をすることには許可をもらえたので、門前払いはなさそうだが……どう反応されるかは俺たちの提案の方法次第だろう。

もちろん、いきなり大人数を島に入れるのではなく、信頼できる者を少しずつ招くつもりではいるが……

「あつ！ そうだ！」

突然、クレールが声をあげた。

「どうかしたのか？」

「先生にいいものをお見せしたいのですが」

「いいもの？」

いたずらっぽく笑いながら、クレールは口元に人差し指を添える。いわゆる、「音を立てるな」という合図だ。

なんだろうと気になりながら、クレールのあとをついていくと、案内してくれたのは彼女が寝ていたテントだった。

「……？ 夜中に何か発見でもしたのか？」

「まあ、そんなところですね。ある意味では大発見です……どうぞ」

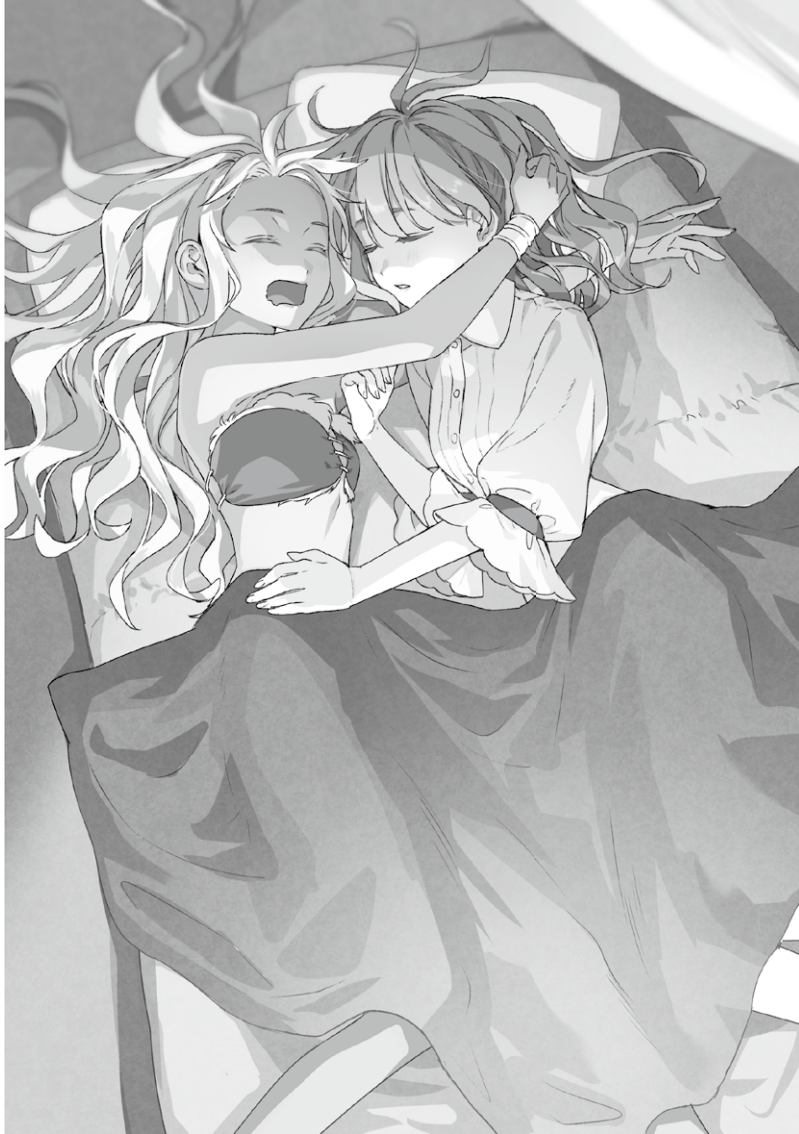
そう言っつて、クレールがテントの入口を開けると、そこには――

「うん？」

テント内では、寝息を立てながらパトリシアとイムが爆睡中。

隣同士で寝ているが、寝相のせいもあるか、お互いに抱きしめ合う形になっている。……もしかして、見せたかったものつてこれか？

確認のため、クレールの方へ視線を送ってみる。



「めちゃくちゃ可愛くないですか？」

瞳をキラキラ輝かせ、小さいながらも力が入った声で語るクレール。

どうやら、彼女が俺に見せたかったものというのはふたりの寝顔らしい。

「ま、まあ、確かに可愛らしくはある」

「ですよね！」

そのあともクレールはふたりの寝顔を満足げに眺めていた。

ただ、さすがに俺がずっと教え子ふたりの寝顔を眺めているのは問題があるだろうと、その場を離れてウエンデルとジャクリーヌのテントへ向かう。

「おっ？ もう起きてるようだな」

ふたりのテントはすでもぬけの殻だった。

「どこへ行ったんだ……？」

まさか、ふたりだけで島の調査に出たのか？

辺りを見て回ろうとした時、俺は強烈な魔力を感知して振り返る。

魔力の発生源は後方の森の中。

これは……間違はなくジャクリーヌのものだな。

「ほお……魔力がさらに洗練されているな」

卒業してからも魔法の鍛錬を怠っていないかった証拠だ。

まあ、単独であるのワイバーンを倒した事実からもそれがよく分かる。ジャクリースならば、いずれ世界を股にかけて活躍する高名な魔法使いにも肩を並べる実力者となるだろう。教え子のたくましい成長を目の当たりにして、教師としても喜ばしい限りだ。

俺は魔力を感じた方向へ歩き始める。

場所はキャンプを行ったところからすぐ近くだった。

発生源に近づくと、そこには予想通りの姿が。

「ふう……」

呼吸を整え、魔力を練っていくジャクリース。そのすぐ横で、ウエンデルがあくびをしながら彼女を眺めていた。

ウエンデルの手には自身が開発したと思われる見慣れない魔法具と、それを調整するための器具が握られている。

どうやら、彼は彼なりの鍛錬に汗を流しているようだ。

「はっ！」

短い雄叫びのあと、ジャクリースの目の前にあつた大きな岩が、まるで鋭利な刃物でスパツと斬られたように真二つとなった。

目には見えない鋭い切れ味を持つ刃。つまり、この魔法は――

「魔法か……やるじゃないか、ジャクリース」

「オーリン先生??」

パチパチと拍手をしながら近づくと、ふたりは同時に言つて、ペコリと頭を下げた。

「朝の鍛錬とは感心だな」

「学園時代から続けている習慣ですもの。自然と体が動いてしまいましたわ。それより、勝手な行動を取つてしまい、申し訳ありません」

「僕は止めたんですけどねえ……ジャクリースがどうしてもつて言うから」

「ウエンデル！ あなただつて最終的には一緒に来たじゃありませんの！」

朝から元気にワイワイと騒ぐふたり。

どちらも外見は成長しているし、学園時代よりも力をつけてはいるのだろうけど、こういうノリは昔とちつとも変わらないな。

「自身を高めるための鍛錬に汗を流していたんだから、咎める理由なんてないさ。姿が見えなくて、心配はしたけどね」

「うっ……」

痛いところを突かれて押し黙つてしまふジャクリース。

ちよつと意地悪だったかな？

「でも、学園時代から続けている鍛錬を今も継続しているのは素晴らしい。ブリッツもそうだったが、こういう努力は必ず実を結ぶよ。君はさらに高みへ行けるはずだ」

「せ、先生……」

真正面からそう伝えると、ジャクリーヌは少し照れたようで、愛用の帽子に手を添えて小さく頷いた。

《千変の魔女》、ジャクリーヌ。

その類まれな魔法の才能で、学園時代からすでに敵なしの存在。魔法に関していえば、教師でさえ敵わないほどの実力を有していた。

ただ、何もせずその力を得たわけじゃない。

彼女はずっと人知れず努力をしていた。

学園にいたほとんどの者がその点に触れず、高い能力を持つ魔法使いとしての素質にばかり注目していたが……本来の彼女の強みは、その優れた才能にあぐらをかかずに、しっかりと努力して己を引き上げられる意識の高さにある。

——この場にいる人間でいえば、もうひとりそれに該当する人物がいる。

ウエンデルもまた、自身の成長のためには努力を惜しまないタイプだ。

「ところで、ウエンデル」

「はい？」

「その魔法具は？」

「これですか？ こいつはなかなかの代物ですよ？」

「ほお……興味深いな」

これまで数々の魔法具を見てきたが、この手のタイプは初めて目にする。

サイズとしては手の平に収まるくらいだが、一体なんの目的で使用するのだろうか。

「一年くらいかけて製作している魔法具なんですけど、いわゆるトラップ系の魔法を見破るためのアイテムなんです」

「トラップ系の魔法を？ それは凄いな」

偽物をつくったり、姿を消したりするトラップ系の魔法は、同業の魔法使いでも見破るのが困難だと言われている。

「わたくしでさえ見破るのが難しいトラップ系の魔法を、そのアイテムで？ 本当に可能なんですの？」

「まだ完璧とは呼べないけど、精度は高いと思うよ」

「それは楽しみですね」

ウエンデルの魔法具技師としての腕を信頼しているからこそ、ジャクリーヌも頭から否定しないのだろう。

出会って間もない頃の彼女なら、その高いプライドが邪魔をして素直に評価できなかったはず……これもまた、大人になった証だな。

ふたりの成長に目を細めていると、どこからともなくお腹の鳴る音が――

「わ、わたくしとしたことが……」

照れ顔のジャクリーヌを見て、ウエンデルが微笑む。

「夢中になると時が経つのを忘れちゃうからねえ。お腹が空いてもしょうがないよ」

「それだけふたりが頑張ったという証拠だ」

お腹を空かせている元教え子たち。

そして、未だにテントで爆睡中の現教え子たち。

四人とクレールの力を借りて、朝食づくりに励むとするか。

「さあ、行こうか」

「はいー」

朝から元気いっぱいジャクリーヌとウエンデルを連れて、キャンプ地へ戻った。

それから、キャンプ地で軽めの朝食を終える。

その後、俺たちはバジル村へ向けて出発することにした。村人たちにウエンデルとジャクリーヌを紹介したいし、新しい村づくりの相談もしたいからな。

十

バジル村を目指して歩き始め、しばらく経った頃。

「それにしても……この島の自然は本当に凄いですね」

クレールに続いて、ジャクリーヌとウエンデルが言う。

「学園にいた頃は鍛錬の一環でいろんな森へ行きましたが、ここまでの規模はなかなかお目にかかれませんでしたわ」

「それでもためらいなく前進できるのは、間違いなくあの頃の経験が役に立っているからだよ」

そんな会話を聞き、俺も昔を懐かしみながら、鬱蒼とした木々をかき分けて、森の奥へ歩を進める。

思えば、ブリッツとエリーゼも一緒になって、この手の環境には何度も挑戦してきたな。

この島で生まれ育ったイムと、順応性の高いパトリシアは、ウエンデルたちよりもさらに足取りが軽かった。

「先輩方、もうちょっとで目的地のパジル村ですよ」

「楽しみにしていてね！」

無邪気な笑顔をこちらに向けるパトリシアとイム。

それを見てまんざらでもない表情のジャクリーヌとウエンデル。

彼らからすれば、可愛らしい妹ができた感覚なのかな。

こうしてパジル村へ到着すると、すぐに村の人が集まってきた。長の孫であり、村人から絶大な人気のあるイムが来たせいでもある。

だが村人たちはそれ以上に、連れてきた元教え子ふたりにも関心を寄せているみたいだ。「あのふたりは……?」

「俺の元教え子ですよ」

村人のひとりにそう尋ねられ、俺はすぐさま答えた。

「おおっ！ オーリン先生の教え子でしたか!」

「よ、よろしくお願ひします」

村人を前に、緊張気味のジャクリーヌとウエンデル。

しかしふたりの緊張をよそに、村人たちは俺の教え子だと分かると、一気に警戒を解いていろいろと話しかけていた。

ふたりは少し戸惑いを見せながらも、親しげに語りかけてくる村人と交流を重ねていく。それにしても……最近はラウシユ島でも先生って呼ばれることが増えたな。

一応、今は賢者でも教師でもないのだが、昔から呼ばれ慣れたものだから別に違和感はない。むしろしつくり来るな。

さて、そろそろ村づくりの話を進めたいのだが……みんな、村人と賑やかに話している。邪魔するのも野暮つものだし、長のところへは俺ひとりでこっそり向かうとしよう。

長の家か——ここに来るの、久々だな。

「あんたか。久しぶりだね」

「はい。お元氣そうで何よりです」

テントに着いてお互い挨拶を交わすと、早速村づくりについて相談する。

「ほお……この島に新しく村をつくる、と」

長の口調が重くなる。

さすがに、そうトントン拍子に話は進まないか。

「島に来る者の行動については、すべて俺が責任を持ちます。それに彼らの力があれば、この島の謎の解明に大きく近づくはずですよ」

「いいじゃないか。ワシは歓迎するよ」

「ですのうか——えっ?」

「聞こえなかったかい。その村づくりを認めると言ったんだ」

先ほどまでの重苦しいムードから一転して、あっさり長が言った。

まさかあの流れから、こうもすんなり了承を得られるとは予想外だ。

「なんだい。納得いかないかい?」

「そ、そんなまさか! 了承をただでホツとしたんです」

「それだけワシらはお主を信頼しておるんじゃよ」

「では、その信頼に応えられるように頑張ります」
 出会った頃、よそ者である俺たちは村人に警戒されていた。イムの母親であるシアノさんを助けたことで信頼を得られたが、まさかここまでとは知らなかった。

俺としても、誠実に接しようと思掛けてきたが、その気持ちがちんと伝わっているようでは何よりだ。

「それで、村はいつ頃できるんだい？」

「長の許可を得てから取りかかろうと考えていたので、予定はまだ何も決まっていません。このあと大陸側へOKが出たと伝えるので、すぐに建設を始められるかと」

「だとしたら、少なくとも数ヶ月は要するね」

「ええ。もちろん、その間も島の調査は続行してやります。実際に行うのは、俺とパトリシア、イム、クレール、そして新しく加わったウエンデルとジャクリーヌの六人になるでしょう」

それから俺は、今後の予定を長へ説明していった。

話し終えると、テントの外へ出て村人たち、それに彼らと話していたパトリシアたちを集める。

そして、同じような内容を伝えた。

パジル村の人々は、俺やパトリシアと会ってからは、外との交流を続けていきたいと考

える者が増え、今や村の大半がそちらの意見に流れている。

おかげで新しい村づくりに関しては、全員が歓迎ムードとなっていた。

喜ばしいことではあるが、少し不安も感じる。

「ますます責任重大になってくるな……」

プレッシャーも大きい。しかし、同時にやりがいを感じる。

ラウシュ島での生活は、ギアデイス王立魔剣学園で教師をしていた頃とはまた違った、刺激のある日々だった。

とりあえず、屋敷に戻ったらすぐにグローバーへ連絡し、村づくりの詳しい段取りを決めなにと。

ちなみにグローバーもまた、俺の昔の教え子だ。今はエストラダ王国の騎士団で働きつつ、俺との連絡係を担ってくれている。

さて、また忙しくなってくるぞ。

第2話 動きだす世界

その日はパジル村で、ウエンデルとジャクリーヌの歓迎会を開いてくれることになった。

なお、この歓迎会には、これから交流を深めていく新しい村が作られるのを祝う意味も込められている。

今後、このラウシユ島がどのように発展していくのか。俺は島民の大人と、その未来像について語り合う約束を交わす。

宴会の準備はパトリシアたちに任せ、俺は一度屋敷に戻ることにした。
今回の件をいち早くグローバーへ知らせたかったのだ。

十

拠点きょてんにしているポロポロな屋敷へ戻った俺は、すぐに部屋の水晶玉すいしゆたまへ魔力を注ぐ。

この水晶玉は連絡用のアイテムで、エストラダの王城と通信が可能なんだ。ただし、やり取りできるのは声だけとなる。

グローバーは水晶の前で待機していたらしく、即座に応答があった。

『先生、バジル村の人々は、村づくりに対してどのような反応を？』

やっぱり、そこがずっと気になっていたようだな。

「村人は島外からの入植者を受け入れると言ってくれた。村づくりは問題なくやれるはずだよ」

俺がそう伝えるとグローバーの感情が大爆発。

『よっしー』と言ったあと、ガッツポーズでもしているような様子だった。

——と、ここで、俺はある点が気になった。

グローバーが叫んだあと、金属同士が触れ合うような音がしたのだ。

「グローバー、もしかして……鎧よろいを装備そうびしているのか？」

『えっ？ ええ、今日は演習えんじゆがありまして。本当はもつと身なりを整えてからお話を聞くべきなのですが……着替える時間もなくて』

「演習……？」

騎士団が演習を行うのは珍めずらしいことではない。だが、つい一昨日も行ったはず。

この辺りの地域はすでに戦争を忘れて久しく、そこまで熱心に演習えんじゆをする必要はないはずだが……この前のワイバーン襲撃しゅうげき事件が尾を引いているのだろうか。

「何かあったのか？」

嫌いやな予感がしてそう尋ねると、少し間が生じた。

「……」

「何かあったんだな？」

俺が追及ついすると、グローバーは重苦しく口を開いた。

「……厳密げんみつに言いますと、これから起きるかもしれないと言った方が適切かもしれま

せん』

「……? どういう意味だ?」

『オーリン先生は、デハートという国を知っていますか?』

「ああ。エストラーダ王国からそれほど遠くなく、国家の規模としても大差ない国だったと記憶しているが……」

『その通りです。実は今朝方、そのデハートが謎の軍勢による攻撃を受けたという情報が入ってきたんです』

「何?」

謎の軍勢による攻撃?」

「……にわかには信じられない話だ。」

「信憑性はどれくらいある?」

『かなり高いです』

今度は即答。

「どうやら、本当に確かな筋からの情報らしい。」

「それで、デハートの状況は?」

『襲撃してきた軍勢は、数自体はデハートの軍を上回っていたそうです。でも統制が取れておらず、デハート側の地の利を活かした攻撃もあり、撤退まで追い込まれたとか』

これもまた信じがたい情報だった。

「敗れたとはいえ、兵の数がデハートを上回っているというなら、その軍勢もどこか別の国の騎士団とかじゃないのか? ただのゴロツキ連中が集まっただけとは到底思えない」

『それは自分も同感です……が、追加で入った情報によると、その軍勢は兵士の練度や作戦の連携など、あらゆる点でお粗末だったらしいですよ』

「うむ……ますますわけが分らないな」

『正直、我々も混乱しています』

陽動か?

そうなるとかえって不気味さもあるが――

「まさか……」

一瞬、脳裏をよぎったのはギアデイス王国だった。このお粗末な行動は……最近統率を失いつつある、ギアデイス王国が絡んでいてもおかしくない。

ギアデイス軍がデハートを襲撃した……いや。だが、さすがにそれはないか。

ジャクリースとウエンデルから、ギアデイス国王のエルスが、不穏な動きをしていることは聞いている。

とはいえ、いきなり他国へ戦争など仕掛けるものだろうか。

「……考えすぎか」

『どうかしましたか？』

「いや、なんでもない。何かあったら、また連絡をくれ」

「分かりました。こちらも村づくりに必要な建築資材や人材などは、すぐに手配いたします。何か必要な物があれば言ってください」

「ありがとうございます」

そう言っ、俺は水晶への魔力供給を遮断する。

「……騒がしくなりそうだな」

国外で少し不安な動きが始めているみたいだ。

できれば、何も起きずにいるくらいいいが……そう願いつつ、俺は宴会へ参加するため、再びバジル村へ向かった。

十

すでに、すっかり夜となっている。

バジル村への距離が近づいてくると、だんだんと賑やかな声や音楽が聞こえてきた。

「お？ やっているな」

俺がいつ合流できるのか、その詳しい時間は分からなかったので、「準備ができ次第、

宴会を始めてもらって構わない」と告げておいた。

この様子だとかなり盛り上がっているようだな。

森を抜けて村へたどり着くと、村人はみんな笑顔で宴会を楽しんでいた。

よく見ると、その輪の中にウエンデルとジャクリーヌとクレールの姿もあった。

俺を発見したパトリシアが駆け寄ってくる。

「あっ！ 先生！」

「楽しんでるようだな」

「はい！ 先生の方はどうでしたか？ グローバーさんと連絡は取れました？」

「グローバーにはきちんと村づくりについて伝えておいたよ。後日、こちらに建築資材や人材を送ってくれるそうだ」

「じゃあ、村づくりは——」

「それらが到着次第、すぐに取りかかる」

「分かりました！ 全力で頑張ります！」

パトリシアは元氣よく返事をし、いつもの明るい笑みを見せた。彼女も、村づくりがいかに重要かという事は分かっているらしい。

「先生〜！」

そうこうしていると、イムが俺の腕にしがみついている。

「おっと。どうしたんだ、イム」
 「そうです！ なぜ腕に抱きつく必要があるんですか！ その明確な理由を詳細に説明してください！」

「落ち着きなさい、パトリシア」

とりあえず、興奮するパトリシアをなだめながら、イムに離れるように伝える。

ふたりに申し訳ないが……なんというか、まるで子犬みたいだな。

その時、俺たちへ近づくと影がふたつ。

「先生、お疲れさまです」

「先に始めさせていただきましたわ」

パトリシアたちと比べると、ウエンデルとジャクリーヌはさすがに落ち着いているな。

年齢もふたりに比べたら五歳くらい上だし、当然といえば当然か。

しかし、その立ち振る舞いはパトリシアとイムに大きな影響を与えているようで――

「……………」

特に言葉を発してはいないが、憧れの眼差しでウエンデルたちをジッと見つめるパトリシアとイム。

このふたりにとって、ウエンデルたちは、俺とは違った方向からアプローチできる先生になりそうだな。

さて、そんなウエンデルとジャクリーヌにも、グローバーから伝えられた村づくりの件を話しておくか。

――ただ、近隣国で起きたという騒動については、伏せておくことにした。

何がどう関与しているのか、その詳細な情報が分からない以上、余計な心配をかけたくない。

ただ、この先、エストラーダ王国に危機が訪れるとなったら……移住し国民となった俺たちも黙ってはられない。しかるべき対応をしなければ。

そんな風に考えていると、ジャクリーヌが声をかけてきた。

「オーリン先生、難しい顔をされていますよ？」

「む？ おっと、すまない」

「先生、何かあったら僕たちにも相談してくださいね。あの頃よりはいろいろと経験も積んでいますし、きつとお役に立てるはずですよ」

「助かるよ、ウエンデル」

ギアデイス王国では黄金世代と呼ばれ、国の中枢を担う存在だったふたりが力を貸してくれるなら、これ以上に心強いことはない。

「おっ？ オーリン先生がいらしたぞ！」

「さあ、先生、どうぞこちらに！」

俺が来たことが広まり、村人が続々と集まってきた。そういえば、彼らと島の未来について語る約束をしていたんだったな。

「さあ、先生も一緒に宴会を楽しみましょう?」

「早くしないと、せっかくの料理が冷めてしまいます!」

「そうだよ、先生!」

「あと、クレールさんが意外と食べるので、なくなってしまう心配もあります」

村人たちからそんな風に、口々に声をかけられる。

「はは、分かったよ」

やれやれ……今日の宴会は騒がしくなりそうだ。

第3話 勝敗の行方

「なんてザマだ……」

眉間にシワを寄せたブリッツはそう吐き捨てた。

視線の先には、戦いを終えて戻ってきたギアデイス王国の騎士の列がある——だが、その騎士たちの表情は冴えない。

当然だ。

戦いの結果は、言い訳のできない見事な完敗。

万全を期したはずが、遙か格下の小国デハートにしてやられる結果となり、騎士たちは失意に肩を落としていた。

ギアデイスの戦史に残る、まさに歴史的な敗北だ。

原因は明白。

実戦での経験が皆無に等しい者を多く送り込み、彼らのやらかしの尻拭いをしている間に攻め込まれたのだ。

それだけではない。

デハート王国の領土は山岳地帯が多く、相手はその地の利を活かした攻めを繰り返して、ギアデイスの兵を大いに苦しめた。

一方、ギアデイス側にはなんの対抗策もなく、ただ無謀に攻めては押し返されるといった行為の連続——しまいには大幅に戦力を減らし、撤退せざるを得ない状況となってしまうのである。

「ひどい有り様だな」

ブリッツの横で同じく帰還した騎士を眺めている同僚の口調は、憐れむようなものだった。

もちろん、ただ勢いだけで乗りきろうとする浅はかな考えに振り回された者たちへ向けられた言葉だ。

「純粋な戦力差だけを考慮すれば、どう転んでも負けはなかったのに……ブリッツの予想通りになったな」

ブリッツは無言のまま、思いを巡らせる。

だからこそ、王家の人間もこの敗戦は予想外だったはず。

肝を冷やしているのは、忖度まみれの成績をつけた学園関係者だろう。

今回の戦線には、本来力不足であるにもかかわらず、学園から優秀な成績であると偽りの評価を受けた貴族の子女たちが、多く参加していた。

その中にはオーリンの学園追放のきっかけとなった、ローズ学園長の息子——カイル・アリアロードも含まれている。

オーリン以外の教師は、学園長からの叱責を恐れ、貴族へ恩を売るような形で実力のないう者に最高の成績を与えた。

そんな実態を把握していない者たちが、学園の生徒たちの中に最強の天才世代が誕生したと勘違いし、彼らで結成した部隊によって戦争を仕掛けるまでに至ったのだ。

しかもカイルはいえ、部隊長の地位まで与えられている。

その結果が、この情けない姿であった。

「今回の敗戦……国王陛下はさぞお怒りだろう」

「最初から勝機などない、負けるべくして負けた戦いだ。むしろあれだけの数が生きて戻ってきたことは、奇跡に近い」

結果としては完膚なきまでの敗北。

だが、当初ブリッツが予想していた被害よりも少なく終わったのは、ひとりでも多くの騎士を無駄死にさせまいと尽力したベテランたちの功績だ。

「一体なんのための戦争なんだ……」

「こんなものは戦争とは呼べない。ただのごっこ遊びだ」

「お、おい、聞こえろとまずいぞ」

「聞かせてやればいいさ」

ブリッツはそう言って踵を返すと足早にその場を去った。

目的地は騎士団の詰め所。

そこで、騎士団長に抗議をするつもりだった。

さすがに今回の件で懲りただろう。

貴族の私物と化しつつある騎士団が本来の役割を果たせるよう、きつと働きかけてくれるはず。

「だが、そんなブリッツの希望はあっさり打ち砕かれた。
「……今、なんと？」

団長を訪ねると、「ちようと君を呼ぼうと思っていた」とのことだった。

「が、その内容はブリッツが望んでいたものとは正反対だった。

「次の戦闘では君にも出てもらおうつもりでいる」

「俺が……っ！」

「カイル隊長直々のご指名だ。史上最年少で聖騎士の称号を得た君なら、どんな不利な状況でもそれを覆せるだろう」

「っ!？」

その名を聞くと虫唾が走る——喉元まで出かかった言葉だが、ブリッツはこれをグツとこらえた。

今回の大戦犯である男。そして、自分の恩師の追放のきっかけとなった張本人。

そんな人間が自分を尻拭い役に指名したのだ。これほどの侮辱は生まれて初めてだった。

そんな無能な男の下につくなど、断じて受け入れることができない。

ブリッツは何も言わず、飛び出すように団長室をあとにした。

大雨が降る中、びしょ濡れになりながら王都をさまよう。

「俺は……」

何もかもが嫌になった。

いつそ、すべてを忘れ去りたいと思うほどに。

そう考えながら当てもなく歩き続けていると、正面から女性が近づいてくる。

「ブリッツ!? どうしたの!？」

偶然通りかかったエリーゼが駆け寄ってきた。

エリーゼは憔悴しきっているブリッツを見て、何があったのかをすぐに察した。

「ねえ、ブリッツ。……一週間後に大聖堂へ来て」

「えっ?」

「いいから。話したいことがあるの」

「……ああ、分かった。必ず行くよ」

力なく、ブリッツはそう返事をしたのだった。

第4話 村づくり、開始

俺——オーリンと、パトリシア、イム、クレールのラウシュ鳥調査団。そこにウエンデルとジャタリーヌが加わり、合計六人となった。

エストラーダ王国では、グローバーが中心となってラウシュ島へ投入する資材や人材の用意をしている。

パジル村の人とは良好な関係を築^{きず}けているので、それらが届き次第、村づくりに挑める環境が出来上がっていた。

「今日はその新しい村となる予定地へやってきた。」

「この前も見たわけだが、今回はもう少し計画を詰めるために建設予定図を描^{えが}くつもりだ。」

「素晴らしい土地ですね」

到着早々、クレールは全身に陽光を浴^あびて伸びをしている。

そのあとから、ウエンデルとジャクリーヌがやってきた。

「海から近いけど、これだけ高ければ津波の心配はなさそうですね」

「川が近いというのもいいですね」

さすがは俺のもとでたくさん野外授業をこなしてきた卒業生たち。教えたポイントをしっかりと覚えてるな。

「ねえ、パトリシア。あの大きな木の近くにあたしたちの家をつくらうよ」

「いいですけど……って、あたしたちとは？一緒に住むんですか？」

「ダメ？」

「うぐっ……そ、その目は反則ですよ……」

パトリシアとイムは早くも自分たちが住む家の場所を決めていた。

イムはどうやらふたりで住むつもりらしいが、パトリシアの方はまだちょっと悩^{なや}んでいるように見える。というかしきりにこちらをチラチラ見つけているが……助けを求めているのか？

「オーリン先生」

「ん？」

パトリシアたちの方へ行こうとしたちよūdその時、クレールが声をかけてきた。

「どうかしたのか？」

「いえ、その……オーリン先生もここに住みますよね？」

「当然だ」

「だったら、私と一緒に暮^くらせませんか？」

「え？」

いや、それはさすがにまずいと思う。

この提案にはウエンデルとジャクリーヌも……あれ？

なんか想像していた反応と違うな。

ふたりとも「それはそれであり」みたいな顔をしている。

その横ではイムが目をパチクリとさせ、パトリシアがこの世の終わりみたいな表情を浮

かべていた。

——パトリシアやイムの教育上、俺とクレールが同じ家で暮らすのはちょっと問題だろう。

俺は断りの理由を、やんわりとクレールに伝える。

結果、残念そうにはしていたが、なんとかクレールには受け入れてもらえた。

「それにしても、本当に不思議な島ですね」

クレールとの会話が終わると、次はウエンデルが口を開いた。

「これだけ大きい島が目と鼻の先にあるというのに、エストラーダ王国はどうして今まで手をつけなかったんでしょうか。それらしい理由は言っていましたけど……正直、それだけで諦めるとは思えないのです」

「どうだろうなあ……ただ、港町を見ると、少なくとも先代国王が何かしら手を打とうとしていた痕跡はある」

「ですが、現国王はそれを知らないようでしたわ」

ウエンデルとの会話に、ジャクリーヌも参加する。

それは、俺も気になっている点だった。

あと、気がかりなことは、この島の大きさだ。

地図などから大体の大きさは把握しているつもりでいたが、実際に島内を歩き回ってみ

ると、その三倍は広く感じる。

これだけの規模になると、今のメンバーだけでは対応しきれない……エストラーダ王国で募集しているという調査団の新たな人材が到着するまでは、このメンツでやれる範囲をしっかりと調べていこう。

「よし。昼飯を食べたら周辺を調査してみるか」

俺の呼びかけに、みんなは「はい！」と元気よく返事をしてくれた。

そして、昼食後。

新たに村をつくる場所の周辺に何が存在しているのか、その詳細な情報を集めるために調査を開始した。

相変わず鬱蒼と木々が広がっているものの、それ以外にこれとおかしな点は発見できない。

「モンスターの類は見当たりませんわね」

「そのようだな」

ジャクリーヌが探知魔法を使って調べたが、どうやら脅威となる存在はいないようだ。ただ、何か違和感を覚えたようで、

「本当に……不思議な島ですわね」

ボソツとそう呟いた。

「君もそう思うか」

「ええ……なんというか、うまく表現できないのですが……あえて言うなら、地上にあるダンジョンとでも言いましようか」

「地上にあるダンジョン、か。いや、なかなか的確だと思うよ」
的確どころか、思わず唸ってしまいうくらいピッタリな表現だ。

この島には多くの謎がちりばめられている。

前に発見したあの難破船は、結局、どこからやってきて、なんの目的があつて、この島を目標したのか。座礁しているところを見ると、もしかしたら偶然ここへたどり着いた可能性もあるが……それなら、船員はどうなったのだろう。

そして、島を調査したと思われる痕跡の数々。

エストラーダの先代国王は、港町をつくっていた。そこまでやっていったのなら、この島に調査団を送るか、あるいは移住を考えていたとしてもおかしくはない。

問題は、なぜそれを中止したのか。

あの港町は、なぜ活用されなかったのか。

バジル村と交流をしなかったのはなぜか。

今となつてはその関係者がいるのかいないのか、それすらハッキリしない。

グローバーが過去の書物などを読み返して先代国王の思惑を探っているが、今のところはこれといった情報がない。

「ラウシユ島……あまりに謎が多すぎるな」

「ひとつひとつ解明していくしかありませんわね」

「ああ……やれやれ。忙しくなるぞ」

「そういう割には嬉しそうですわね」

「そうか？」

まあ、実際楽しみではある。

考古学に造詣が深いとは言いがたいが、前々から興味は持っていた。著名な考古学者が記したとされる、世界中の遺跡を紹介する書物は今も愛読している。

ジャクリーヌはそのことを知っているから、あっさり嬉しそうだと思拔いたのかな。

「それにしても、先代国王は、なぜ自分の息子にも黙ってこの島を調査しようとしたのでしょうか」

「もつと言えは……なぜ途中で放棄したのかって謎も含まれるな」

俺とジャクリーヌがあれこれ議論を交わしていると、

「きゃっ!？」

突然、パトリシアの悲鳴が聞こえた。

「パトリシア!？」

俺はジャクリーヌを連れ、急いで彼女のもとへ向かう。

「あつ、先生……」

俺が見たのは——近くの小川で水遊びをしている途中、誤まちって転んでしまい、ビシヨビシヨに濡ぬれてしまったパトリシアの姿だった。

「怪我けがはないか!？」

「だ、大丈夫ですよ」

パトリシアに駆け寄って、足の状態をチェック……うん。本人が言うように、ひどい怪我はなさそうでひと安心だ。

「気をつけるんだぞ」

「は、はい……」

む、失敗した。

心配になるあまり少し語気が強くなって、パトリシアを落ち込ませてしまったようだ。

「先生も一緒に水浴びしようよ！ 冷たくて気持ちいいよ！」

そんな状況を知ってか知らずか、イムは元氣よくはしゃいでいる。

「まったく……しようがないな。ウエンデル」

「は、はい！」

「そんなところで見てないで、加勢してくれ」

「分かりました！」

俺は見学をしていたウエンデルを自軍へ引き入れ、水をかけてくるイムに応戦する。

だが、イムもクレールとジャクリーヌを加えて万全の態勢で俺たちを迎むかえ撃うった。

結局その日は、夕方になるまで小川で遊んでしまったのだった。

十

予定地周辺の調査を始めて数日が経った。

俺たちは不審ふしんな点や危険な場所がないか調べつつ、村をつくる上で必要になる下準備をできる限り進めていく。

その間の食料については、大陸から送られてくる物資に加え、森で採とれる木の実や果物、野生動物の肉、さらには畑で収穫しゆかくした野菜や海釣りづりで得た魚など、バリエーションが豊富で飽あきがこなかった。

調査の途中、俺は先日発生したデハートへの侵攻事件しんこうじけんについてグローバーから情報を送ってもらうことにした。

それによると、あれ以降目立った動きはないようだが……楽観視らくかんしはできない。